

ウエルカム・トゥ・サハラ

アルジェリア・ジャネット空港、深夜一時。フランスはパリ・オルリー空港から到着したのだ、ここは国際空港、まごころなきインターナショナル・エアポートである。

がしかし。滑走路脇にボツリ建ついかにも古びたコンクリート平屋の建物には管制塔もなく、制服姿の係員もおらず、入国ロビーに入ると教室ほどの広さもない。国際空港として間違いなく世界最貧クラス、蛍光灯数本の薄暗さが寂しさをそそる。

しばらくすると中年男がやって来て、おもむろにカウンターに座った。勝手知ったるアリサが真ん前に陣取ったおかげで入国審査が一番乗り。気が付いた数十人の客たちがあつと言う間に長い列を作る。

無論パソコンなどない。浅黒い入国審査員（というよりどう見てもご近所のおっさんだ）はギョロリとした目でパスポートと顔を何度も見比べ、ゆるゆると書類を眺め、裏返してさらに眺めて、ドンツ、とスタンプを押した。この調子だと列の最後は優に一時間待ちだろう。

手押し台車に積まれたグレゴリーのザックをかついでX線マシンへ。唯一国際空港の証明ともいえるそのマシンは残念ながらベルトコンベアが動かず、身振りで指示されるままボックスの奥にグレゴリーを押し込むと、向こう側のおっさんが引つ張り出した。ふうう。待合ロビーに出ると、さまざま色の民族衣装を身につけターバンを巻いた、砂漠の男たちでいっぱいだった。

ガイドのハマニと握手を交わす。身長

190センチほどの大男。ヒザ下まである深い紫の上着、鼻まで覆ったターバン。初めて出会った砂漠の男。トゥアレグは圧倒的な存在感を全身にみなぎらせていた。

わずかな灯りに照らされたパーキングには、見慣れたトヨタのランドクルーザーが中古車フェアよろしくずらりと並ぶ。サハラ砂漠はランクル王国。20年落ちのランクルに乗り込み空港を出ると、ハマニはおもむろにアクセルを踏み込んだ。猛然と身震いするエンジン。

暗い。とにかく暗い。初めてのサハラの夜は新月、しかも雲が空を覆い星もない。ヘッドライトの光に浮かぶ範囲以外、何も見えない。隣に座る妻、美和の表情もまったく分からない。開け放った窓から吹き込む風が肌寒い。

とにかくハマニはよく飛ばす。ヘッドライトが照らすアスファルトはひたすら一直線で、対向車もまったくおらず、そうか、俺は砂漠にいるんだな、初めてそう実感した。と、その時。助手席に座ってハマニとタマシエック語のトゥアレグ語で話していたアリサの黒いシルエットが、突然振り返つてこう言った。「ウエルカム・トゥ・サハラ」

恋に落ちたパリジェンヌ

友人を介してアリサと知り合ったのは、5年近く前になる。

日本とフランスのハーフ、アリサ・デコード。豊崎はパリで生まれ育った生粋のパリジェンヌ。キュートなワガママ娘だ。

アンティーク・ディーラーの親父に連れら

れて少女時代から世界を旅し、フランスの大学で日本語を学んでトウキョウに数年住み、拠点をパリに戻してから旅した砂漠で、アリサは恋に落ちた。

果てしない砂の海を、ラクダのキャラバンで旅するトゥアレグの民。その生き方は文明の最先端で生まれ育った我々にとって、ロマンそのものと言える。そのロマンはワガママなパリジェンヌのハートをわしづかみにした。それはきつと恋のようなものだ。

紀元前の遙か昔、地中海沿岸に居住していたベルベル人の一部が南下し、北アフリカに移住した民がトゥアレグ。7世紀前半にアラビア半島で興ったイスラム教の勢力拡大を嫌い、以来千余年、ラクダとともに砂漠で暮らす遊牧民。ノーマッドとして生きて来た。

輸送手段の発達や国による定住政策。バラボラの衛星チャンネルから流れるきらびやかなアラブの暮らしや、西洋の経済至上主義。つまり他の少数民族の伝統同様、今や淘汰される運命の真ただ中にある「遊牧」という生き方に、トゥアレグは愛着と誇りを強く抱いている。しかし同時に、世界を覆う近代化。西洋化の波は、サハラにまたがるアルジェリア、マリ共和国、ニジェール、リビア、モリタニアの中でも、国家としてのシステムが進んだアルジェリアで特に激しく、トゥアレグの遊牧暮らしは過去の古めかしい文化として減少の一途をたどる。

サハラを訪れるたび消え行くロマンの現実と直面したアリサは、あることを思いついた。日本人とフランス人と呼びかけて、ラクダのオーナーになつてもらおう。そのラクダのキャ

